

2025年度 入学試験問題

2月3日 第3回

国語(45分)

注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から13ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 机の上にあるQRコードのシール(どれでも良い)を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
7. 句読点・記号も字数に数えます。
8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一 1〜10のカタカナの部分を漢字に直しなさい。
また、11〜15の読み方をひらがなで書きなさい。
つづき字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

1 ジョヤの鐘を鳴らす。

2 小学校のオンシに偶然会おう。

3 飛行機をソウジュウする。

4 赤ちゃんのつづらなマナコ。

5 美術館をケンチクする。

6 ダイヤモンドコウザンを発見する。

7 鉄道モケイを作る。

8 外国のドウカを集める。

9 一日の運動量がへる。

10 ケワしい道を進む。

11 世界を統べる神。

12 役員の職を固辞する。

13 観音が化身となって現れる。

14 新勢力が台頭する。

15 これはだれの仕業だ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校二年生の森川航大は、自宅で見ごとな庭作りをしている大学生の園原拓海、祖母の菊子と親しくなる。拓海は母親の春香と仲が悪く、祖母の家で暮らしていた。

航大は菊子から、拓海の祖父の命日近くになると、差出人不明の郵便でランタナ（II花の名前）の押し花葉が届くという話を聞く。

その後、春香は離婚することになり、地元に戻る前に拓海との面会を希望する。春香と会う最後の機会かもしれないのに、会おうとしな

い拓海に、航大は手紙を書くことを提案する。
次の文章は、航大がその手紙を持って春香と会う場面である。

「はじめまして。拓海さんの友人の、森川航大です。拓海さんのお母さんですよね？」

1 彼女はきよとんとして目を瞬く。

「そうだけど。え、何、どういうこと？ あなた、拓海の友達なの？」

「そうです」

「拓海は？」

「来ません」

どう伝えるべきかわからず、航大は短く言い切った。胸の内がチクリと痛む。

拓海の母は、頭の中で状況を整理するようにテーブルに視線を落とした。その仕草を目にして、航大はハツとする。その姿は、考え事をするときの拓海とよく似ていた。

やがて、彼女は口角を上げ、愉快そうに笑い始めた。軽快に、声を上げて笑う。

「いやあ、これは流石に予想外。来ないだろうなどは思っていたけど、わざわざそれを友達に伝えさせるとはね。随分と親切で、ビックリしちゃった」

彼女の反応に、航大は面食らう。怒ったり、落ち込んだりするパターンは想像していたが、こんなあつからかんとした反応は想定していなかった。

ひとしきり笑うと、彼女は煙草を灰皿に押し付け、頬杖をついて航大を見上げた。

「それで、君は伝言を頼まれただけ？」

「いいえ。2 拓海さんからの手紙を届けに来たんです」

「手紙！」

彼女は目を見開き、さらに口角を上げた。想定外の展開を愉しんでいるようだ。

航大はバッグからノートとクリアファイルで挟んでおいた封筒を取り出し、拓海の母へと手渡した。

彼女はそれを受け取り、指でつまむようにしてひらひらと振る。

「さてさて。一体どんな恨み辛みが書かれているのやら」

その軽薄な態度に、航大はムツとする。拓海があればほど悩み、苦しんでいたのに、彼女はまるで平然としている。彼女にとつて、息子と会えるかどうかは、些末な（＝とるに足りない）ことだったらしい。もしかしたら、『最後に会って話したい』という頼みも、儀礼的なものだったのかもしれない。

息子さんの気持ちを考えたことがあるんですか、と 文句のひとつも言いたかったが、ぐっと堪えて一礼する。

「それでは、失礼します」

これで役目は果たした。航大はドアの方に体を向け、そっと息を吐く。

「ちよつと待って」

呼び止められ、振り返る。彼女は笑顔のまま、向かいの席を指差していた。

「折角だから、ちよつとお話ししましょうよ」

どう返事をしたものか、と航大は【Ⅰ】をひそめる。気持ちの大部分は、断つてさっさと帰りたいと思っているが、彼女はどんな話をするつもりなのだろうという興味もあった。

航大が言葉に詰まっていると、彼女は店の主人に向かって「すみません。コーヒーひとつ」と注文した。

店主は返事をせずに、読んでいた雑誌を閉じて立ち上がった。緩慢な（＝ゆるやかでおそい）動作でカップを用意し、コーヒーを淹れる準備を始める。

拓海の母がにっこりと笑い、「コーヒー、飲めるでしょ？」と航大に訊ねる。

4 強引さに呆れながら、仕方なく、航大は向かいの席に腰を下ろした。

（中略）

「私と拓海が大喧嘩したときの話、聞いたことある？」

「いいえ。聞いたことがないです」

戸惑いながら、航大はかぶりを振る。

視線をコーヒーカップに落として、春香が短く息を洩らす。

「拓海が中学三年生のころ、あの子のお祖父ちゃんが亡くなったの。あの子がいま住んでいる家にいたお祖父ちゃんが」

「それは、聞いたことがあります」

「あら、そうなのね。それじゃあ、拓海がお祖父ちゃんっ子だったことも知ってる？」

「はい。子供のころは、あの子の家に遊びに行くたび、お祖父さんの庭仕事を手伝つてたつて聞きました」

「そうそう。あの子の家にいくと、拓海はいつも庭で過ごしてたわ。お祖父ちゃんと一緒に庭仕事をするのが、よっぽど楽しかったんでしょね」

懐かしそうに、春香は目を細める。が、すぐに神妙な顔になった。

「そんな大好きなお祖父ちゃんが亡くなって、拓海は目に見えて落ち込んでたわ。まさに心ここにあらずつて感じで、本当に痛々しかった。葬儀を終えて、一度あの子の家に寄つただけで、あの子はほとんど言葉を発することなく、ただ呆然と庭を眺めていた」

以前、菊子からも同じような話を聞かされた。お祖父さんの死因は脳梗塞で、本当に突然のことだったらしい。落ち込んだ拓海の様子は、

見ているこっちの【Ⅱ】が痛むほどだった、と彼女は語っていた。

普段から泰然自若（＝落ち着いて物事に動じないさま）としてい

る拓海の悄然（ししよんぼり）とする姿が、航大にはうまく想像できない。犬猿の仲である母親と会うかどうかで悩んでいたときでさえ、彼はほとんど感情を表に出していなかった。

彼にとつて、祖父の死はそれだけ衝撃的な出来事だったということだろう。

「どんな言葉も、あの子には届きそうもなかった。でも、何かしてあげたかったから、思い出にと思つて、菊子さんにお願ひして庭の花を二輪摘ませてもらったの。あ、菊子さんのことは知ってる？ 拓海のお祖母ちゃんなんだけど」

「知ってます。いつもお世話になってます」

「そう。良い人よね、菊子さん」

春香が優しく微笑む。菊子との関係は、悪くなかったようだ。

「菊子さんは、切った花が家までちゃんと元気でいられるように、しっかり水処理までしてくれたわ。帰る直前に私はそれを受け取つて、手に持ったまま助手席に乗り込んだ。そのときは元旦那の運転で、車で来ていたの。まあ、当時はまだ『元』じゃなかったけどね。拓海との大喧嘩が始まったのは、その帰り道」

春香の声が沈む。彼女にとつても、思い出したくない過去のなだらう。

6 では、何故それをわざわざ自分に話すのか。不思議だったが、それを問うタイミングが見つからず、航大は黙つて話の続きに耳を傾ける。

「拓海は後ろの席に座つていて、俯きがちにしていたから、最初は私が花を手をしていることに気付いてなかったの。気付いたのは、帰路についてしばらくしてから。そこからはもう、7 大騒ぎ」

「大騒ぎ？」

聞き間違いかと思ひ、航大が聞き返す。大騒ぎなんて、拓海のイメージから遙か遠くにある言葉だ。

「そう、大騒ぎ。拓海は私が切り花を手をしているのを見て、大声で喚きだしたの。『その花はどうしたんだ！』、『何のために摘んできたんだ！』って」

「どうしてそんなことに？」

「こつも言われたわ。』その花たちは生きていたのに！』って」

航大は息を呑む。そういうことか。

どれだけこまめに世話をしようと、切り花にした時点で、花の寿命は短くなるものだ。大切な祖父を亡くしたばかりでナイーブ（＝感じやすいさま）になつていた拓海には、それが受け入れられなかったのだろう。当時の彼は、『死』というものに敏感になつていたので。

いや、あるいは、もつと単純なことなのかもしれない。祖父の死で塞ぎ込んでいた彼は、どこかで感情を爆発させてしまいたかつたのではないだろうか。内側に溜め込んだものを吐き出す機会を、密かに探していたのではないか。苦しくて、叫びたかつたのだ。それをぶつける相手として、彼は日常的に不満を溜めていた母を選んだのかもしれない。

「私の言葉に、拓海はまるで聞く【Ⅲ】を持つてくれなかつたわ。

乱暴な言葉を喚き散らして、私を批難し続けた。私も最初は我慢してただけど、結局堪えられなくなつて、『花のひとつや二つでギャーギャー騒ぐな』って怒鳴り返しちやつた。これが大喧嘩の始まり」

そう言つて自嘲（＝自分で自分をあざ笑ふこと）気味な笑みを浮かべると、春香は過去の自分に呆れるように頭を振つた。

後悔とは、そういうものだ。引き返すことはできず、振り返り、嘆くことしかできない。

春香は笑みを引つ込め、自らの髪を撫でる。

「どんなことを怒鳴り合つたのか、もうほとんど忘れちやつたけど、最後の一言だけはなんとなく憶えてる。思い付くままに、『あんだだつて、花のために雑草抜いたりしてやるじゃない。雑草の命はどうでも

いいの?』って言い返したわ。 8 我ながら、幼稚な反論だと思う。でも、それで拓海は黙っちゃったの。振り返ったら、あの子は目を真っ赤にして「IV」を噛んでいた」

航大は目を伏せ、当時の拓海の心情を推し量ろうとする。春香の反論は確かに幼稚なようだが、同時に核心をついた言葉でもある。おそらく拓海は、自分が知らず知らずのうちに、命に優劣をつけていたことに気付いてしまったのだ。それは仕方のないことだし、普通のことだと思いが、傷心の拓海には大きなショックだったのだろう。植物にも命はあるとハッキリ理解しているからこそ、余計に辛かったのかもれない。

春香は背凭れに身を預け、天井を仰ぐ。

「その顔を見て、やつちやつたなって思った。でも、そのときは私も拓海に腹が立つてたから、謝る気にはなれなかった。苛々して、家に帰ったら、折角持ち帰ってきた花もすぐに捨てちゃった。それ以来、拓海とはまともに言葉を交わしていない。家を出てから顔を合わせたのは、片手で数えられるくらいだけ。それで、いまはもう見ての通り」二人にとつての、最後の親子喧嘩。この一件があり、拓海は家を出ることに決めたのだろう。

春香は視線を航大に向け、穏やかに微笑む。

「君もこんなふうにならないように、気を付けた方がいいよ」

その一言で、どうして彼女が自分にこんな話をしたのか、航大は理解した。これは、彼女からの警告だ。親と口を利かないような状態だったと打ち明けた自分のことを、心配してくれたのだ。その気遣いは、何だか拓海に似ている。

顔きながら、航大は考えを改めた。こうして会う前までは、拓海の母は相手の事情など意に介さないような、自分本位な人間だと思いついてきた。しかし、言葉を交わすうちに、そんなイメージはどんどん薄れていった。さばさばした性格で、捉えどころのない人物ではあ

るが、他人を慮る能力に欠けているわけではない。

それに、拓海が彼女のことを嫌っているほど、彼女は拓海に悪感情を抱いていないように思える。そりが合わず、一緒にいるだけで苛々させられたという話は事実だろう。だが、それが直接嫌悪に繋がっていったわけではないのではないか。彼女にとつて、日常的な喧嘩は、親子間のコミュニケーション手段にすぎなかったのかもしれない。

一方的に会う約束を取り付けたことも、拓海が拒絶することを予期していたからなのではないか。強引にでも日時を決めなければ、そもそも話が進まないことを彼女は知っていたのだ。

拓海が来ないことはわかっていたはずだ。それでも今日、彼女はここに来ている。飄々とした（「こだわらない」様子からして、一縷（「きわめてわずか」）の望みしかけたというような切実なものではなく、宝くじは買わなきゃ当たらないくらいの精神だったのだろう。外から見ているだけだとわかりにくいのが、春香は拓海のことを大切に思っている。そんな気がしてならなかった。少なくとも、どうでもいい存在ではない。

思考を巡らせているうちに、航大はひとつの仮説に思い至った。元々頭の中にあつた推測に当てはめただけのことだが、筋書きとしては無理がない。

数秒の逡巡（「ためらうこと」）の後、航大は自らの推測を春香にぶつけてみることにした。もう会うこともないだろうし、という小狡い考えに身を委ね、真実を知りたいという好奇心に従う。

「春香さん」

「何?」

「園原家に毎年押し花葉を送っていたのは、春香さんですか?」

10 覚えて前置きなく訊ねると、春香は目を見張った。

その反応を目にして、航大は確信を強める。思った通り、押し花葉の送り主は春香だ。

菊子は、あのランタナの押し花葉を亡くなった夫宛のものではないかと考えていたが、そうではない。あの葉は、拓海宛のものだったのだ。

そのことに思い至ったのは、(中略) 図書室で調べものをしていたときのことだ。花図鑑でランタナのページを開いていたときに、気になる項目が目に入った。

誕生花。その名の通り、生まれた月日にちなんだ花のことだ。航大が手にしていた花図鑑には、その月日が記載されていた。

ランタナは、十月二十七日の誕生花だった。その日は、拓海の誕生日だ。

押し花葉が届くようになったのは、拓海の祖父が亡くなった翌年からという話だったが、それは拓海があの家で暮らし始めた年でもある。送られてくる時期についても、祖父の命日だけではなく、拓海の誕生日にも近い。

そのことに気付いた航大は、葉は誕生日プレゼントとして拓海に贈られたもののではないかと考えた。が、考えただけで、当時はそれをどうしようしようとは思わなかった。そもそも、送り主も匿名である事情もわからないのだから、それ以上どうしようがなかった。

しかし、いま目の前にいる春香が送り主だと仮定すると、とてもしつくりくるのだ。差出人や宛名を書かなかつたのも、誕生日当日に届くように送らなかつたのも、全ては拓海に悟られないためと考えれば合点がいく。気付かれ、拒絶されることを恐れながらも、彼女は息子の誕生日を祝うために、毎年欠かさず送り続けたのだ。今年だけエゾムラサキだった理由は不明だが、何か彼女なりの意図があつたはずだ。そして、航大にはもうひとつ確かめたいことがあつた。口を固く結び、押し黙ったままの春香に訊ねる。

「拓海さんと大喧嘩した日に持ち帰っていた花も、本当は押し花にしてあげようと考えていたんじゃないですか？」

花を摘んで持ち帰ることが、どうして拓海のためになるのか。航大は話を聞きながら、**A**違和感を覚えていた。切り花として飾ったところで、長くはもたない。それなのに、春香は『思い出にと思つて』と話していた。

そこで、ふと思いついた。彼女は、持ち帰った花で押し花葉をつくらうとしたのではないかと。祖父が育て、拓海が世話を手伝った花を、ずっと手元に残せるようにしてあげようと考えたのだ。そうすれば、祖父との繋がりをいつでも思い出せる。

しかし、祖父の死でナイーブな状態だった拓海は、怒りに我を忘れて、母親の言い分を聞こうとしなかった。その結果が、例の大喧嘩だ。

航大は、無言で春香の返答を待った。確証はないが、筋は通っているはずだ。

臆想にふけるように目を閉じていた春香だったが、不意に目を開き、鞆から黒い長財布を取り出した。千円札を抜き出し、テーブルの上に置く。

困惑する航大にニツコリと笑いかけ、春香は長財布と封筒を鞆にしまいながら立ち上がる。

「手紙、届けてくれてありがとう。お話しできて楽しかったわ。お釣りは取っておいて」

一息にそう言つて、彼女は颯爽と店外へ去つていった。取り残された航大は、閉じたドアをぼかんとして見詰めながら、どうすべきかと思案する。春香を追いかけて、しつこく真相を問い詰めるつもりはない。彼女の対応は、**B** 答えを教えてくれたようなものだ。

いま悩んでいるのは、当時の春香の真意を、拓海に伝えるべきなのだろうかということだ。それを知れば、拓海の母に対する悪感情も少しは和らぐかもしれない。ただ、今更真実を伝えたところで、何かが

解決するわけではない。むしろ、拓海の後悔を増やしてしまう可能性の方が高そうだ。春香が自らの口で明言しなかったのは、まさにそれを危惧したからではないかとも思えてくる。

テーブルの上の千円札を眺めながら、航大は短く息を吐く。

「話さない方がいいか」

そう独り言ち、コーヒーカップに手を伸ばす。

ミルクと砂糖を入れたはずなのに、¹¹コーヒーはまだ苦かった。



¹² 駅のホームのベンチに腰掛け、春香は電車の到着を待っている。

緊張から解放されたからか、何だか頭の中がぼんやりしている。全身の力が抜け、油断すると宙に浮きあがってしまうのではないかと心配になるほど体が軽い。

それにしても、と春香は航大のことを思い出して、口元を緩める。

拓海が来ることはないだろうと思っていたが、まさか代わりに友人を超越すとは、**C** 予想していなかった。元気で暮らしていて、良い友人がいる。それを知ただけで大満足なのに、あの拓海が自分に手紙を書いてくれるなんて、まさに青天の霹靂（―急に生じた大事件）だ。

航大が押し花葉の件に触れたときは、心臓が跳ね上がった。拓海から聞いていたのだろうか。いや、どちらかと言うと、そういう話をするのは菊子の方が気がする。

航大の推測は、どちらも正鵠を射て（―核心をついて）いた。いや、もしかしたら推測なんて立派なものではなく、ただの山勘だったのかもしれないが、どちらにしても正しい。¹³ 毎年押し花葉を送っていたのは春香だし、大喧嘩の原因となった花を押し花にしようとしていたことも事実だ。

ランタナが拓海の誕生花だと知っていたのなら、もしかしたら航大は、自分のことを、喧嘩をして離れていても息子の誕生日を祝おうとする

優しい母親だと思ってくれたかもしれない。だが、申し訳ないが、現実はそのではない。自分は、**D** 狭量（―心のせまいさま）な人間だ。大喧嘩した後も、ずっと拓海に対して腹を立てていた。折角あなたのためを思って花を摘ませてもらったのに、と。

あれは、ほとんど当てつけで送っていたのだ。『あのとき、本当はこんなふう押し花にするつもりだったんですよ』という無言の嫌味と抗議のつもりだった。だから、葉を拓海が受け取っていいようがいまいが、どちらでもよかった。

しかし、最後の贈り物だけは、当てつけの気持ちは一切なかった。あれに込めたのは、ただただ ¹⁴ 自分勝手な願いだけだ。

それを見つけたのは、離婚して家を出るために、身の回りの物を整理していたときのことだった。

十年以上前につくった、ワスレナグサの押し花葉。それを見た瞬間、拓海と一緒にこの花を見つけたときのことを思い出した。

あの日は、家族で春香の実家に向かう途中だった。道中にある丘の上で小休憩をとるために車から降りると、まだ小さかった拓海ははしゃいだ様子で野を駆けまわり始めた。小さな体でひたすら走り続ける姿は、一度スイッチを入れたら電池が切れるまで動き続ける列車のオモチャを想起させた。

¹⁵ だが、そんな暴走列車が、不意に足を止めて屈みこんだ。怪我でもしたのだろうか、と春香は慌てて拓海の元へと駆け寄った。すると、彼は小さな可愛らしい花に瞳を輝かせていた。この子は本当に花が好きなんだな、と微笑ましい気持ちになったことを憶えている。

それから、春香は拓海の隣に並ぶように屈んで、ワスレナグサという名前と、その花にまつわる伝説を教えてあげた。随分と昔のことだから、あの子は憶えていないだろう。

昔、とある国の騎士が、恋人のために岸辺に咲くこの花を摘もうとした。しかし、騎士は誤って川に落ちてしまう。騎士は必死の思いで

恋人へと花を投げ、「私を忘れないで」と叫んで川底へと沈んだ。だから、この花の名前はワスレナグサなのだ。花言葉は『真実の愛』、そして『私を忘れないで』。

話を聞き終えた拓海は、渋い顔をしていた。まだ幼かったから、人が川に沈むという話が恐かったのかもしれない。

何気ない時間だったが、あのときはとても楽しかった。幸せな気分浸ったまま、記念にと思い、春香はワスレナグサを一輪摘んで持ち帰ったのだ。そして、それを押し花葉にした。だが、戸棚にしまつてずっとその存在を忘れてしまっていた。ワスレナグサを忘れるなんて、タチの悪いジョークだ。

ワスレナグサを眺めながら、春香は拓海のことを想った。

親子だからって、無理に仲良くする必要はない。嫌われていたって構わない。強がりではなく、春香は本心からそう思っていた。親も子も、それぞれの人生を自由に生きれば良い。その方が、何かに縛られて生きるよりもずっと快適で健全だ。

ただ、会えなくなることは平気でも、忘れられることは寂しかった。拓海の中から自分の存在が消えてゆく未来を想像し、胸をえぐられたような気持ちになった。忘れられたくない。恨みや怒りでも構わない。嫌いなままでいいから、自分のことを憶えてもらいたかった。

それで、今年はランタナではなく、十数年ぶりに見つけたワスレナグサの押し花葉を贈ることにしたのだ。それがただの自己満足だと知りながら、『私を忘れないで』という想いを託して。

電車が駅のホームへと滑り込んできた音で、春香はハッと我に返る。ようやく来たかと思ひ、立ち上がりかけて、到着したのは反対路線の電車であることに気付いた。

中腰の姿勢で、天井から吊るされた電光掲示板を確認する。春香が待っている電車はいま、二つ前の駅に停車しているようだ。

再び腰を下ろし、小さく息を吐く。それから鞆を開けて、中から封

筒を取り出した。航大が届けてくれた、拓海からの手紙。帰ってから読もうかと思っていたが、中身が気になって仕方がない。

少し悩んで、春香はもう開けてしまうことに決めた。いつ開けようが、中身が変わるわけではない。

開け口に貼られたセロハンテープを剥がし、封筒を斜めにする。出てきたのは、折りたたまれた便箋一通だけだった。

「さて、どんなことが書かれているのかな」

妙な緊張をこまかすように呟き、春香は便箋を開く。

17 冗談みたいに真つ白な便箋を見て、啞然とした。

『18 あの花はワスレナグサではなく、エゾムラサキ』

母に対する積年の恨み辛みどころか、たった一行、それだけしか書かれていなかった。便箋をひっくり返してみても、他に書かれていることは何もない。

わけがわからず、春香は困惑する。

これだけ？ 本当に？

ワスレナグサではないって、どういうこと？

混乱したまま、春香は携帯を取り出し、『エゾムラサキ』と検索した。すると、ワスレナグサとそっくりな花の画像が出てきた。さらに調べると、ワスレナグサの近縁種だと書かれている。ただ、ワスレナグサは元々ヨーロッパ原産で、エゾムラサキは在来種である。総称としてワスレナグサと呼ぶこともあるようだが、厳密には、両者は違う花なのだそうだ。

どうにか冷静さを取り戻そうと努めながら、春香は頭の中を整理する。

これはつまり、私が間違っていたということ？

拓海にワスレナグサと教えた花が実はエゾムラサキで、私が勘違いしたままであることに気付いて訂正してきた？

あの日のこと、憶えていたの？

というか、こんなメッセージを送ってきたということは、葉の送り主が私であることも、その意図も、拓海は全てお見通しだったということになるのではないか？

それとも、単に間違いを指摘したかっただけ？

頭の中が熱を持ち始め、春香は眉根を寄せる。駄目だ。平静を保とうとしても、全く思考が定まらない。自分の推測は、どこまで当たっているのだろうか。

パンク寸前の頭に手を伸ばそうとして、握っていた封筒の中に微かな感触を覚えた。まだ、中に何か入っている。

春香が封筒の中を覗き込むと、短冊のような細長い紙が見えた。指で挟むようにして、そっと中身を取り出す。

「これは……」

入っていたのは、シオンの押し花葉だった。急ごしらえでつくったのか、全体的によれよれで、不格好だ。

春香はじつとシオンの花を見詰める。これで、もう疑いようがない。いつからかはわからないが、拓海は私が押し花葉の送り主であると気付いていたのだ。それを伝えるために、これを送ってきたのだろう。

でも、何故シオンなのだろう。たまたま手元にあっただけで、深い意味などないのだろうか。

いや、違う。拓海がこちらの意図に気付いていたのだとしたら、もしかしたら。

まさかと思ひ、再び携帯で、今度は『シオン』と検索する。

画面に表示された一文に目を通し、春香は口元を綻ばす。

「19 中々洒落たことが出来る男になったじゃない」

メッセージに気付いて、わざわざ返事をくれたというわけだ。

駅のホームに、電車の到着を告げるアナウンスが響く。

春香は立ち上がり、乗降口の前へと移動する。口元の笑みを引っ込めようとしたが、無理だった。周りの人から奇異な目で見られるかも

しれないが、自然とこぼれてしまうのだから仕方がない。手にした葉を眺めながら、春香はさらに笑みを深める。

『あなたを忘れない』

それが、シオンの花言葉だった。

電車が停車し、深く息を吐き出すような音と共にドアが開く。軽やかな足取りで、春香は車両に乗り込んだ。反対側のドアに背中をもたれるようにして、シオンに向かって囁く。

「忘れないですよ」

鞆から手帳を取り出し、慎重な手つきで手紙と葉を挟む。

折り目が付かないように優しく、丁寧に。

(真紀涼介『勿忘草をさがして』東京創元社より)

問1 【ⅠⅡⅢⅣに入る言葉として適当なものを次から一つずつ

選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一度しか使えません。)

ア 目 イ 頭 ウ 頬 エ 眉 オ 耳

カ 鼻 キ 胸 ク 唇

問2 □ A Dに次の言葉をあてはめ、記号で答えなさい。(同じ

記号は一度しか使えません。)

ア まるで イ ずっと ウ もっと エ 既に

問3 — 1 「彼女はきよとんとして目を瞬またたく」とありますが、こ

れは「彼女」のどのような気持ちの表れですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 最後の機会かもしれないのに自らは会いに来ない息子に腹を立てている。

イ 目の前の青年が高校生とは思えないほど落ち着いて礼儀正しいので感心している。

ウ 息子の代わりになぜ見知らぬ青年がそこにいるのか理解できず驚いている。

エ ずっと会わずにいた息子に良い友人がいてよかったですと胸をなで下ろしている。

問4 — 2 「拓海さんからの手紙」を航大が大切にみついている

ことがわかる表現を3ページから十八字でぬき出し、はじめとおわりの五字で答えなさい。

問5 — 3 「文句のひとつも言いたかったが、ぐっと堪こたえて一札す

る」とありますが、ここでの航大の様子を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 拓海の母親が離婚する前に息子に会っておきたいと自分から申し出たのにもかかわらず、その誘さそいが形式的なものだったとわかり、あきれている。

イ 拓海の母親は息子の悩みを表面的には理解しているように振舞っているが、母親の本心はわからないままなので、その様子を早く拓海に伝えようとしている。

ウ 拓海が苦しんで書いた手紙を母親が乱暴にあつかう様子にいきどおりを感じたが、目上の人だから礼をつくすべきだとていねいに対応している。

エ 母親が拓海の複雑な気持ちを重く受け止めようとしないうちにいらだちを感じたが、自分のすべきことは終わったと考え、この場から立ち去ろうとしている。

問6 — 4 「強引あきさに呆あきれながら」とありますが、航大がこのように感じた理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 航大が好きな飲み物を選ばず、好きでもないコーヒーを拓海の母親に無理矢理おしつけられたから。

イ 航大が返事をする前にコーヒを注文することで、拓海の母親に話を続ける口実を作られたから。

ウ 話すべきことを話し終えたのに、この場に来たお礼としてコーヒを拓海の母親に注文されたから。

エ 航大が拓海の親子関係に興味を持っていると誤解され、拓海の母親に話を引き延ばされたから。

問7 — 5 「庭の花を二輪摘ませてもらった」とありますが、
① 菊子はその花を大切に思っていたことを、 — 5以降の本文から
三字でぬき出しなさい。

② 春香はだれのために、どのような目的でこの行動をとったのです
か。次の□にあてはまるように二十字以上三十字以内で答えな
さい。

□ という目的。

問8 — 6 「では、何故^{なぜ}それをわざわざ自分に話すのか」とありま
すが、この疑問に対する答えになるように、次の□にあては
まる表現を — 6以降、7ページの◇までの本文から、三十六
字でぬき出し、はじめとおわりの五字で答えなさい。

春香が□から。

問9 — 7 「大騒ぎ^{おおさわぎ}」とありますが、拓海が騒いだ原因について、
航大はどのように推測していますか。その説明として適当なも
のを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア きれいな花だけを選んで摘んできた春香の行動を知り、信じら
れないと思ったのではないか。

イ 祖父が大切に作った庭を平気で踏み^{ふみ}にじった春香のことが、許
せなかったのではないか。

ウ 祖父の死で抱え込んでしまった苦しみを、一挙に出してしま
い、たかつたのではないか。

エ 祖父の花は祖父に供えてあげべきもので、持ってきてはいけ
ないと思っていたのではないか。

オ 花の命を短くしてしまった春香の行動を、受け入れられなかつ
たのではないか。

カ 喧嘩はしても心を許している母にだけは、不満をぶつけたかつ
たのではないか。

問10 — 8 「我ながら、幼稚^{ようち}な反論だと思っ」
とありますが、
① このようなやりとりを表現したことわざとして最も適当なものを
次から選び、記号で答えなさい。

ア 口も八丁手も八丁

イ のど元過ぎれば熱さを忘れる

ウ 真^{まこと}つ赤な嘘

エ 売り言葉に買い言葉

② この「反論」により拓海が気付いたことは何だと航大は考えてい
ますか。解答らん^{らん}に合うように十五字以上二十字以内で答えな
さい。

問11 — 9 「園原家に毎年押し花葉を送っていたのは、春香さんですか？」とありますが、航大がそのように推測した理由を、十五字以上六十字以内で答えなさい。

問12 — 10 「あえて前置きなく訊ねる」とありますが、航大が春香にこのように質問をしたのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 突然航大が思いもよらない質問をした時の春香の率直な反応を見てみたかったから。

イ 春香には秘密を守らねばと思う気持ちがあるのはわかっているので、どうせ言わないだろうと思っていたから。

ウ 春香にはもう二度と会わないとわかっているのに、失礼な質問の仕方でも構わないと思っただから。

エ 春香の人がらが予想に反していたので、突然踏み込んだ質問をしても許してくれると思っただから。

問13 — 11 「コーヒーはまだ苦かった」とはどのようなことを思わせる表現ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 証拠を突きつけても納得しない相手への恨み。

イ ためこんだ不満ばかり聞き続けた後の不愉快さ。

ウ 問題を解決することはできないいたたまれなさ。

エ 言葉を尽くしても説得にに応じてもらえないむなしさ。

問14 — 12 「駅のホームのベンチに腰掛け、春香は電車の到着を待っている」とありますが、ここからはじまる春香の心情の記述や回想が終わり、この場面にもどるのはどこからですか。本文からはじめの五字をぬき出しなさい。

問15 — 13 「毎年押し花葉を送っていた」とありますが、その目的を本文から十二字でぬき出しなさい。

問16 — 14 「自分勝手な願い」とありますが、それは何ですか。本文から七字でぬき出しなさい。

問17 — 15 「だが、そんな暴走列車が、不意に足を止めて屈みこんだ」と同じ表現技法を用いている文を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 疲れ果てて、足が鉛のように重く感じられる。

イ 上級生が、レギュラーを目指す下級生の壁となった。

ウ 春のそよ風が優しく彼女にささやきかけた。

エ 吹雪が氷の刃のごとき鋭さでおそいかかってくる。

問18 — 16 にあてはまる一文として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア お弁当のごはんとおかずは交互に食べるタイプだ

イ 天ぷらうどんのエビ天は最後までとっておくタイプだ

ウ ショートケーキのイチゴは最初に食べるタイプだ

エ ソフトクリームはコーンではなくカップを選ぶタイプだ

問19 — 17 「冗談みたいに真つ白な便箋」という表現から、春香は手紙についてどのような予想をしていたと考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分への不満などがたくさん書かれているのではないかと。

イ 親子の思い出が事細かに書かれているのではないかと。

ウ 祖父への思いがいていねいにつづられているのではないかと。

エ 今の暮らしについてのくわしい報告があるのではないかと。

問20 — 18 「あの花」とは、どの花のことをさしますか。最も適当

なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 拓海が航大に託した押し花葉の花。

イ 二人の大喧嘩の原因となった花。

ウ 毎年祖父の命日に送られてきた押し花葉の花。

エ 今年、園原家に送られてきた押し花葉の花。

問21 — 19 「中々洒落た^{しゃれ}ことができる男になったじゃない」とありますが、この言葉には、春香のどのような気持ちが含まれていますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア 幼かった拓海が、親もとを離れて立派に生活していることに感動している。

イ 自分へのメッセージを花言葉に託したことに、拓海の成長を実感している。

ウ 花言葉で間接的に思いを伝える拓海の行動に、息子の素直な愛情を感じている。

エ 押し花葉を贈り物に選んだことは、拓海が再会を望んでいる証拠だと思っている。

問22 中学一年生の二人が、この小説を読んで話をしていました。

() a c にあてはまる言葉として最も適当なものを後のア～キからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Aさん…航大からみた普段の拓海は、(a) タイプの人なんだね。

Bさん…お母さんの春香のことは、(b) 性格だと思ってるね。

航大は最初、春香の態度にあきれていたけれど、しだいに印象が変わったようだよ。

Aさん…拓海は幼い頃、花を見つけると(c) 子どもだったみたい。お祖父さんと庭仕事をしていたことで、さらに植物に興味を持ったんだね。

Bさん…その知識が、このお話の最後に生かされているね。

ア 核心をつく

イ 瞳を輝かせていた

ウ 混乱した

エ さばさばした

オ 泰然自若としている

カ 神妙な

キ 自己満足におちいる

問題は以上です。